

聖書：ヨハネの黙示録 15：5～16：9

説教題：最初の四つの鉢

日時：2021年6月27日（朝拝）

今日から7つの鉢の幻という新しいシリーズがスタートします。実は前回見た15章1節で、それは始まっていました。15章1節：「また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。ここに神の憤りは極まるのである。」 これまで見て来た7つの封印の幻、また7つのラッパの幻と同様、これから見る7つの鉢の幻もイエス・キリストの復活から再臨に至る全期間に関わるものです。一方、この7つの鉢の幻は7つの災害シリーズの最後のものです。またヨハネの黙示録は主の再臨までの歴史を繰り返し描きながら、次第により最後のさばきに焦点を合わせる方向へ進んでいます。神の憤りはよりはっきり示されることとなります。

さて新しい幻が15章1節で始まったかと思ったところ、2～4節に天の光景が差し挟まれました。これからさばきが記されようとしているのに、なぜいきなり神の民の最後の祝福の状態が記されるのか解釈の難しいところですが、ある学者は次のように言っています。この15章2～4節は、これまで見て来た12～14章の幻の結論部分であり、同時にこれから見る幻の導入となるようにここに配置されていると。確かに2～4節は、14章後半で見た最後のさばきの日の続きです。その日に起こることは14章後半のさばきだけではない。神の民はその日に天のガラスの海のほとりに立って最終的な救いにあずかり、神を賛美する。そういうことが言われています。と同時にここはこれから見る幻の導入にもなっている。どういうことかと言いますと、2～4節はイスラエルがエジプトから救われて、海のほとりで神を賛美した時の歌をもとにしたものです。そしてこれから見る7つの鉢のさばきは、前に見た7つのラッパの幻と同じですが、出エジプトの時にエジプトに下った災害をもとにしたものです。つまり私たちはこれから出エジプトの時の災害を思わせる様々な神のさばきを見て行きますが、それらはこの2～4節に描かれた最終的な救いに至るためのものであるということです。この勝利に向かって以後の様々なさばきはなされるということです。

では7つの鉢の幻の導入部分である5～8節を見て行きます。5節でヨハネは天にある証しの幕屋である神殿が開かれたのを見ました。11章19節でも天にある神の神殿

が開かれたと言われていました。そこでは神との親しい交わりの世界がついに開かれたという信者にとっての喜ばしい知らせとして記されていました。しかし今日の箇所は違います。ここで神殿が開かれたのはさばきのためです。神殿が開かれて神が現れることは信者にとっては救いを意味しますが、そうでない者にとっては恐ろしいさばきを意味します。続く6節で7人の御使いが出て来ます。その姿は神殿で仕える祭司を思わせるものであり、また1章13節に出て来たイエス様ご自身の姿も思い起こさせます。世をさばくイエス様の使いとして、イエス様を映し出す姿をしているという意味かもしれません。7節には七つの金の鉢が出て来ます。鉢は神殿の用具の一つです。ここで思い起こすのは5章8節に「金の鉢」がすでに出て来て、その金の鉢には聖徒たちの祈りが収められていたと述べられていたことです。これと関連して、後ほど再度触れますが、6章9～11節には殉教者たちの祈り、「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさないのですか。」という祈りが記されていました。ですからこれから見る7つの金の鉢のさばきは、この聖徒たちの祈りに答えてなされるものであることが暗示されています。8節には「神殿は、神の栄光とその御力から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその神殿に入ることができなかった。」とあり、このさばきの実行はもはや誰も止められないこと、決定的なみわざとしてこれがなされることが示されています。

そうして16章で具体的に7つの鉢のさばきが記されます。今日はその最初の4つについて見ます。さて、この7つの鉢の幻は、先に7つのラッパの幻と同様、出エジプトの時のエジプトへの災害をもとにしてしていると述べましたように、両者はよく似ています。そのさばきがなされる場所と順序がほぼ同じです。ラッパのさばきは8章に記されましたが、第一のさばきは地に対して、第二のさばきは海に対して、第三は川とその水源に、第四は天に、第五は悪の領域に、第六はユーフラテス、第七は最後のさばきという順序でした。これはこれから見る7つの鉢シリーズにおいても同じです。ですからこの7つの鉢のさばきが行われる期間は、7つのラッパのさばきが行われる期間と重なると考えられます。一方で先のラッパの幻よりさばきが進展していることが伺えます。先の幻では1/3がさばかれたと言われていましたが、今回はそのすべてがと言われていています。以下、順番に一通り見て行きます。

まず2節に「第一の御使いが出て行き、鉢の中身を地に注いだ。すると、獣の刻印

を受けている者たちと獣の像を拝む者たちに、ひどい悪性の腫れものができた。」とあります。獣の刻印を受けている人、また獣の像を拝む人とは、これまで見て来た通り、偶像礼拝をする人、皇帝礼拝をする人、神に逆らうこの世に同化している人を指します。悪性の腫れものとは出エジプト記 9 章 10 節で、モーセがかまどのすすを取って天にまき散らすと、それは人と家畜につき、うみが出る腫れものとなったというエジプトの第 5 の災害を思い起こさせます。しかし黙示録は基本的に象徴的表現で書かれています。獣の刻印も、実際に目に見える刻印があるわけではなく、象徴的表現です。ですからここで言われている悪性の腫れものも、文字通りより象徴的に取る方が適切だと思います。言いたいことは、あの出エジプトの時に人々が悪性の腫れもので苦しんだように、あの出来事にたとえられるような苦しみが臨むということです。それは肉体的苦しみを含んでも構いませんが、霊的・精神的な痛みも含むものとしてです。正しいものを退け、誤ったものを拝むことから来る歪み、痛み、災いは必ずその人たちの上に臨むのです。

3 節では第二の御使いが鉢の中身を海に注ぎます。すると海は死者の血のようになり、海の中にいる生き物はみな死にました。これは出エジプト記 7 章 20 節でモーセが水を打つと、水はすべて血に変わったというエジプトの第 1 の災害を思い起こさせます。ラッパの幻でも第 2 のさばきは海に対して行われ、海の 1/3 が血になり、海の中の被造物の 1/3 が死に、船の 1/3 が壊されたとありました。海には多くの資源があり、そこで採れる魚や海産物によって私たちの生活は支えられ、また多くの商売が成り立っています。当時の地中海世界において海は商業を象徴するものでした。ラッパのさばきでは 1/3 が死んだと言われましたが、今日の箇所では、海の中にいる生き物はみな死んだと言われています。決定的な打撃です。そしてこのことが示しているのは文字通り魚がみな死ぬということより、こうして人々の経済生活に恐ろしい危機が生じるということなのでしょう。そういうニュアンスがあることは後の 18 章 17 節や 19 節を参照しても分かります。18 章 17 節に「あれほどの富が、一瞬にして荒廃に帰ってしまった。また、すべての船長、その場所を航海するすべての者たち、水夫たち、海で働く者たちもみな、遠く離れて立ち」とあり、19 節にこうあります。「彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫んだ。『わざわいだ、わざわいだ、大きな都よ。海に船を持つ者たちはみな、ここでその繁栄から富を得ていたのに、その都が一瞬にして荒れ果ててしまうとは。』」このような経済の破綻が生じるということです。その痛み、あるいは死をこれは指しているということです。

4 節では第三の御使いが鉢の中身を川と水の源に注ぎます。するとそれらは血になりました。これは出エジプト記 7 章 21 節に、エジプト人はナイル川の水を飲めなくなったとあることを思い起こさせます。ラッパの幻では 8 章 11 節で水の 1/3 が苦くなり、多くの人々が死んだと言われましたが、今日の箇所にもそのような制限はありません。さばきは全体に拡大します。人々はその生活において、飲み水が飲めないことにとたえられるような非常な困難に陥ります。

5～7 節は後で見ます。その先の 8 節で第四の御使いが鉢の中身を太陽に注ぎます。「すると、太陽は人々を火で焼くことを許された」とあります。ラッパの幻の第 4 のさばきでは太陽の 1/3 が打たれ、暗くなったと言われましたが、ここでは激しい炎熱で人々が焼かれるというさばきとなっています。これはどういう意味でしょうか。これと対の関係にあるのは 7 章 16 節で天の御国に入った民について「太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない」と言われていたことです。これも文字通りの意味よりは、このことに象徴される神の守りを述べているものでしょう。詩篇 121 篇 6～7 節：「昼も日があなたを打つことはなく、夜も月があなたを打つことはない。主はすべてのわざわいからあなたを守り、あなたのたましいを守られる。」ですからこの第 4 の鉢のさばきが述べていることは、人々の生活が守られない状態になるということです。今まで自分を守ってくれていると思っていたこの世の様々なセキュリティー・システムが壊れ、その生活が脅かされる。激しい炎熱で焼かれると表現されるような生活上の様々な苦難が生じるということです。

さて今日の箇所から私たちは何を学ばば良いのでしょうか。最後に読み残した二つの部分に注目して今日のまとめとしたいと思います。私たちはこのようなさばきについて語られている箇所を読んで、どう思うでしょう。厳しい妥協の余地のないさばきについて語るみことばを読み、思わず顔をしかめ、ため息をつくでしょうか。ところが 5～7 節にはそれとは全く異なる反応が示されています。5 節に御使いの言葉として「今おられ、昔おられた聖なる方、あなたは正しい方です。このようなさばきを行われたからです。」とあります。一言で言えばこれは神への賛美です！この災いを前にして、御使いの口から出て来たのは何と神への賛美だった！つまりこれらの災害にはそういうメッセージがあるということです。確かにそうです。私たちは今の世がいつまでも続いてほしいと思っているのでしょうか。この世は悪が横行しています。悪はし

ばしば見逃され、悪者が栄えています。神を認めず、神に逆らう考えが支配的です。このような世がさばかれることなしに、神の正義が住む約束の新しい天と新しい地は来ないのではないのでしょうか。ですからこの世界へのさばきがついに行われ始めたのを見て、天使が「あなたこそ正しい方です」と賛美するのはもっともなことです。これがこれらの出来事を見る聖書的視点であるということです。6 節に「彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは彼らに血を飲ませられました。彼らにはそれがふさわしいからです。」とありますように、悪に対してふさわしいさばきが行われること、これなしに神の正義が支配する真に素晴らしい国、天の御国は来ません。

7 節では祭壇からも次のような声が聞こえたとあります。「しかり。主よ、全能者なる神よ。あなたのさばきは真実で正しいさばきです。」これは誰の声でしょうか。6 章 9～11 節には祭壇の下に殉教者たちの魂がいたと記されていました。ですからこれは彼らの声だと考えられます。彼らは先に触れたように 6 章 10 節で「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさないのですか。」と大声で叫んでいました。その祈りに対する答えとして、ついに神のさばきが行われたのを見て、彼らが「あなたのさばきは真実で正しいさばきです」と賛美したのだと考えられます。もちろんこれは個人的復讐ではなく、神の正義が行われることを求めた祈りです。

ですから私たちはこの世に様々な災いが生じた時、ただうろたえるべきではなく、この視点を持つべきであるということです。それは神の御手によるこの世へのさばきです。私たちも同じ世界に住む者たちとしてそれによって何らかの影響を受け、死に至るかもしれませんが、このさばきは 1 節にあったように、獣の刻印を受けている者たちと獣の像を拝む人たちに対してなされるものでした。私たちはこの世界でともに住む人々を助け、その救いのためにできる限りの働きをすべきですが、一方でこの世に様々な災いが臨む時、この世が壊れて行く方向へ進むのを見る時、そこに神のさばきと、正義が宿る新しい世界に移行するための神のみわざを見て、神を正しい方であると告白して賛美することができるのです。約束の御国がいよいよ近いことを見て取って希望を大きくすることができるのです。

もう一つは、この幸いに生きるために必要なことは自らの罪を悔い改め、さばきからの唯一の逃げ場なるイエス・キリストのもとへと行き、その方を信じることである

ということです。しかし残念ながら人々はそうしません。この期に及んでもというのが今日の箇所最後の9節です。そこに災害に遭った人々が悔い改めるところか、神を冒瀆すると言われていました。ふだん物事がうまく行っている時は神を無視します。私に神など必要ではない。宗教は弱い人が信じるためのものである。私は神などいない。そのように神を普段無視している人たちが災いに遭うと神に怒るのです。なぜ神はこんなことを許すのか！神がいるなら何をしているんだ！だから神などいないのだ！とまで言う。普段神を信じず、神を蔑ろにしているのに、都合の良い時だけ神を引っ張り出し、思い通りにならないことについて神のせいにし、神を冒瀆する。本来災いは自分の生活を省み、何か自分が間違っているのではないかと恐れて、悔い改めへ導かれるためのものです。そういうメッセージが色々な災いにあることが9節に示されています。しかし人々はこの期に及んでもそうしない！と言われていました。

私たちはこれを見て、自らも同じ道を行かないように！と戒められたいと思います。もし何かの苦しみにあるなら、それは悔い改めるための特別な機会です。そして神の怒りから逃れるための唯一の避け所はイエス・キリストです。テサロニケ人への手紙第一1章10節：「この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。」キリストは私たちの身代わりとしての十字架を通して、私たちの上にあった神の怒りを取り去り、私たちを神の祝福に生きる者としてくださいます。その方のもとへ導かれたいと思います。そうする人はさばきの日が来ても大丈夫。世の人々が恐れ騒ぐ中でも、たじろぐことなく、神は「聖なる方、正しい方です」と神をほめたたえることができる。この祝福に生きるようにと今日の箇所は私たちを招いています。そしてやがての完全な義の国、神の国が現れることを望み見て、この神を信じ、神に従う忍耐の道を歩み続けるように！と私たちを招いているのです。